

(序)クリスチャンは、神の国の「すでに」と「いまだ」の狭間で生きています。この箇所パウロは私たちがその「すでに」と「いまだ」の狭間で、如何に生きるべきかを教えています。すでにキリストとともに死に、よみがえらされたが「いまだ」完成されていないものとして「天のものを思って」生きよと。

(1)よみがえった私たち!?(1節)

「…もはや私が生きているのではなく、キリストがわたしのうちに生きておられるのです…」ガラテヤ2章20節

パウロは前章の11、12節で私たちクリスチャンがすでにキリストとともに死に、よみがえらされたことを指摘する。これは、もちろんすでに私たちが完全な復活の体にされたということではない。私たちが完全な主の似姿に変えられる復活は、主の再臨の時まで待たなければならない。しかしパウロは私たちが霊的にはすでにキリストとともに死に、よみがえっている現実を指摘し、その現実のように私たちに命じている。

(2)私たちの希望(4節)

先に4節にある、クリスチャンの生き方の結末を見ておきたい。私たちクリスチャンの行き着く所。それは決まっている。キリストとともに栄光の内に入れられる結末である。私たちの最後は、最高の祝福と永遠のいのちである。死は終わりではない。これが揺るぎない私たちの希望である。では、残りのいのちをどのように生きるべきなのか。

(3)天にあるものを思って(1-3節)

「神の国とその義とをまず第一に求めなさい…」マタイ6章33節
 パウロは命じる。「上にあるものを求め、心を向けよ。」「上にあるもの」とは、すなわち神の国、キリストのご支配である。私たちは「すでに」と「いまだ」の狭間で、自分たちの国籍が天にあることを自覚し、宝を天に積む生き方をすべきである。そしてそれはすなわち、みことばに従う生き方なのである。今週も上にあるものを求め、心を向ける生き方をして行きたく願う。